



現象学と見えないもの
 ミシェル・アンの「生の哲学」のために

庭田茂吉(大学文学部助教授)著

現象学は「現われること」の根拠を問う。そして通常の現象学の立場では、この探究は、「志向性」という意識の構造を説明する作業として遂行される。意識は常に「何ものかについての意識」である。このような意識の前にすべてを「対象」として導きだし、すべてを対象的に見ようとする立場、それが本書で「表象の形而上学」、「知覚の現象学」と呼ばれる、現象学の一般的な立場である。しかし志向的分析には、生それ自身の自己覚知の問題、さらには他者の生の認識の問題などが立ち

はだかる。ミシェル・アンの「生の哲学」が始まるのは、この困難な地点においてである。本書において著者は、以上のように、ミシェル・アンの思索を丹念にたどりながら、生それ自身の現象性を説明している。生は「感情」あるいは「情感性」として直接的に体験されている。しかしまた、この直接性こそが哲学者たちが見逃してきた当のものなのである。本書はこの直接性の理解という難問を、デカルトの「コギト」、ショーペンハウアーの「意志」、さらには「主観的身体」、「プラクシス」、「他者経験」の問題などを論じながら展開している。「志向性の言語が終わったところから」すべてを考え直そうとする著者の試みは、「生」という「見えないもの」の所在を明らかにするとともに、特に他者論に関して、その豊かな可能性を示している。

野村直正(京都産業大学非常勤講師)



ルイ・アルチュセール
 訴訟なき主体

エリック・マルティ著

椎名亮輔(女子大学文学部助教授)訳

本書は、ロラン・バルト全集の編集などで知られる著者による、アルチュセールの自伝『未来は長く続く』を中心とした読解である。したがって、ここで問題になるのは、政治哲学者としてのアルチュセールではなく、自伝の著者としての、あるいは「狂気」のゆえに妻を殺害したとされる精神「病」者としてのアルチュセールである。

「訴訟」過程なき主体」という本書のタイトルが示しているのは、一方でアルチュセールが妻殺しの容疑で逮捕されたにもかかわらず、精神鑑定の結果公

現代思潮新社
 3,000円

訴を免れたという事実である。しかし他方でこのタイトルは、歴史とは主体なき過程であるというアルチュセールのテーゼの逆転でもある。この命題は、社会や歴史を人間を中心にして理解すべきでないという政治哲学上の宣言であると同時に、テクストは著者主体の意図に即してではなく、徹底してテクスト自身の構造に即して読解するべきだとする主張でもあった。

著者が先のテーゼを逆転したのは、このようなアルチュセールの反人間主義に対して、あえて主体としてのアルチュセールを対置する意図があったからである。しかし、だからといって本書は評伝でも、精神的な読解でもない。むしろ本書の記述は、「狂気」による表象と理性的表象の異同、自伝の精神的意味といった理論的分析に重点が置かれており、そこにこそ本書の重要性がある。

松葉祥一(神戸市看護大学教授)



講談社
1,500円

ギリシヤ正教 無限の神

落合仁司 著

ギリシヤ正教とは何であろうか。キリスト教と言えば、カトリックやプロテスタントが連想されやすいが、著者は、キリスト教の源流にはギリシヤ語によつて思考され、信仰されてきたギリシヤ正教の伝統が存在することに注意を向けさせてくれる。しかし、著者の意図はギリシヤ正教の魅力を伝えることにあるだけでなく、むしろ、ギリシヤ正教を通して、宗教そのものの根元的な構造に迫っていくことにある。著者によれば、ギリシヤ正教はイスラームや仏教にも共通した考え方や、すなわち、人間が自らを超えて神や仏と一つになつていくという考え方を持っており、ヨーロッパの宗

教に還元しきることのできない「ユーラシア宗教」としての興行きを有している。

著者は、宗教を「人間とは何かを解く極めて有効な手掛かり」と考えている。本書をユニークな書として際立たせているのは、宗教を語る言葉として普遍言語としての数学、とりわけ集合論を用いている点にある。宗教の命題を数学の命題に置き換えて、その分析可能性を追求することこそが本書の目的なのである。そのために、ギリシヤの教養人たちによる知的葛藤の成果をたどりながら、三一論・パラミズムといった中心的教理を集合論の中で論証していく。その取り組みは、隠された金脈を探し当てるような知的刺激に満ちている。本書を通読すれば、昨今かまびすしい一神教と多神教との誇張された対比がいかに皮相なものであるかに気づかされるだろう。

小原克博（大学神学部助教授）

民族考古学



勉誠出版
1,500円

民族考古学

後藤 明子 著

「民族考古学」というタイトルを掲げる本書は、少なからず一般の読者の予想を裏切るものといえるだろう。というのは、大地に埋もれた遺跡や遺物を発掘し、悠久の歴史を紐解いてゆく、という考古学に対する一般的なイメージとは、その内容・目的を大きく異にするものであるからだ。

本書は、考古資料を読み解くための仮説・解釈モデルを、現在の多様な社会・文化における人間の営みの中に見出そうとする、極めて理論的な著作である。ゆえに、本書には、万人の浪漫

をかき立てる煌びやかな遺物や、壮大な遺跡などは登場しない。代わりに、南太平洋や東南アジアの島々に自ら調査に赴き、そこで著者が出会った様々な人たちの生き生きとした日々の生活が叙述されている。

無論、それは単なる叙述ではない。そこでは、生業・経済・生産などの諸活動に関連する、技術的実践から社会的・文化的意味にわたるまでの鋭い分析が提起されている。さらに、その分析は、考古学の枠を超え、人間の社会的・文化的行為に対する深い理解を導き出している。

とはいえ、本書は、決して難解な専門書ではない。比較的平易な文体で記された各章は、純粋に民族誌として十分楽しめる。そこに読者は、著者の研究者としての真摯な姿勢と、現地の社会・文化に対する柔らかな眼差しを窺うことになるだろう。

大西秀之（北海学園大学研究生）



ミネルヴァ書房
2,300円

ドイツの歴史と文化の旅 — 歴史家の手作り ツアー体験記 —

望田幸男 天文学部教授 著

本書は、歴史家望田幸男氏が自ら手がけた「手作りツアー体験記」である。過密なスケジュールに振り回される今日のパッセージ・ツアーに疑問を感じた著者が、「旅は歴史や文化への見聞を広めるとともに、心の安らぎをえ、明日への活力をもたらすようなものでありたい」との願いをこめて計画した旅の記録である。

内容は「南部ドイツ」「北部ドイツ」「ドナウ・ハプスブルグ」の三つの手作りの旅の経験と、これらの旅の「パン種」にあたる

最初の「ドイツ平和の旅」の記録に分かれている。前半では、ロマンティック街道の南端を出发し、北部ドイツを巡り、ドナウの流れに沿ってプラハの街並へと旅を続ける著者の、ドイツ国家の成立やナチスなどを素材としたドイツの歴史的特徴やドイツ人気質、観光地の解説など様々な話題が展開されている。後半の「ドイツ平和の旅」では、「過去への反省の営みを観察し学ぶ」ことを目指した様々なプログラムが紹介されており、「手作り」平和教育の実践マニュアルとしても役立つ内容である。まさにドイツ史とドイツ旅行の醍醐味を知ることができる一冊である。著者のこうした「旅の余韻」が匂い立つエネルギーッシュな文章は、読者を新たな旅立ちへと誘いなってくれることであろう。

深見麻里子 天文学院文学研究科



ミネルヴァ書房
3,800円

同志社大学人文科学研究所 研究叢書XXXIV グローバル市場経済化 の諸相

平勝廣 天文学部助教授 編著

服部民夫 天文学部教授
小野塚佳光 天文学部教授
角井正幸 天文学部助手
横井和彦 天文学部助教授
嶋田巧 天文学部助教授

ほか執筆

最近における世界経済の最大の特徴は、アメリカ主導によるグローバル市場経済化の進展といえよう。いまだではこれらの動きを肯定的に理解するだけではなく、一定の距離をおいた批判的な論調が強まっている。

本書は、本学人文科学研究所の研究プロジェクトにもとづいた共同研究の成果で、十一氏による共同執筆の形をとり、全体を平勝廣氏が編集されたもので、グローバル市場経済化がもたら

すいわば「光と影」について、多面的かつ批判的に掘り下げて考察した力作である。

全体が第一部グローバル市場経済化の基軸、第二部グローバル市場経済化の諸断面に分かれ、九章で構成されている。分析の対象は、国際通貨制度や金融自由化の問題、アメリカ通商政策の推移や東アジア、韓国、中国、インド、イギリスなどの各国や地域の現状分析が含まれ、多岐にわたっている。いずれの章も興味深い精緻な分析であるが、あえて本書の特色をひとつ挙げれば国際通貨体制の現状についての鋭い批判的な検討が際立っているといえよう。周知のように現代の資本主義は経済の実体からかけ離れた膨大なマネーの均衡破壊的な動向が目立ち、最近のアジア通貨危機もこうした背景のもとに発生したものであるが、これらに関する本書の考察には教えられる所が多々である。全体として示唆に富む有益な書物であるといえよう。

藤村幸雄 天文学部教授



白水社
2,200円

においとひびき —日本と中国の美意識をたずねて

朱 捷
女子大学現代社会学部教授 著

文化論の領域において「におい」は決して新しい主題ではない。例えば香水のような「かおり」については膨大な研究があるし、近年においては「におい」の概念それ自体が文化史（特に「感性の歴史学」）や比較文化論の研究対象となりつつある。本書で扱われる「におい」はしかしそうした嗅覚にもとづく社会的想像力としての「におい」ではない。本書における著者の目的はより美学的なものであり、ひとことで言うなら、日本的な「におい」概念（それは和製漢字「匂」によって象徴されるで

あろう）の形成と変遷のいくつかの局面を通し、この言葉の背後にある美意識を探ることにある。その際に著者が注目するのは中国語の韻「ひびき」という言葉である。著者によれば、和製漢字「匂」は「ひびき」を意味する文字から来たものであるのだが、中国語の「ひびき」、「韻」は日本語の「におい」と同様に物事の余韻、余情をあらわしながらも、日本の美意識とは極めて異なつた中国的な価値観を示しているという。こうした観点から日中の古典作品が巧みに読み解かれ、ふたつの「文化」の差異が明らかにされていく。

このようにして提示された「におい」観は、例えば吉本隆明が「匂いを読む」において明らかにしたような「におい」概念とはまた違ったものである。「におい」概念の複雑さと重要性を見事に示す本書の出版を喜ぶたい。

桑瀬章二郎（女子大学現代社会学部兼任講師）



近代文芸社
2,500円

21世紀の教育に活かしたい 英語の指導・学習の ストラテジー

後洋一
女子大学教職課程ゼミナール特別任用教授 著

本書は、国際化・情報化社会に対応する日本の英語教育のあり方について、高等学校教員を長く勤め、教育現場をつぶさに体験した著者ならではの視野で書かれたものである。

本書の構成は四章からなっている。前半の一、二、三章は、国際理解教育と英語教育、改善へのアプローチ、指導・学習ストラテジーに関して、よりよい教育のあり方を追求している。日本で英語を教えている、いわゆるA・L・Tや中高の教員、生徒等のアンケート調査結果を引用しながら、実証的かつ具体的に説明しているので、説得性がある。

り、読んでいて「なるほど」と納得させられる点が多い。

後半の第四章は本書の中心部分であるが、英語のReading・Writing・Listening・Speakingの四技能について、コミュニケーション能力養成にふさわしい具体的指導例が書かれている。

特に、それぞれの指導法のねらい、指導形態、難易度、留意点が簡潔にまとめられ、指導内容と方法では、各種の指導法、豊富な練習問題、理解度テストの例があげられていることは、すぐにも授業に応用できる点が多く、読者にとつて有難いと思われる。更に、いくつかの指導法には、著者自身の実践研究例とその考察が添えられており、示唆に富んでいる。

本書は、理論的背景を押えた具体的な英語教育改善の提言であり、現在英語を教えている者にとつても、将来英語教員を目指すものにとつても、非常に参考になる書である。

枝澤康代（女子大学社会学部教授）



ミネルヴァ書房
3,600円

現代高校生生活の計量社会学

——進路・生活・世代——

尾嶋史章、太学文学部教授 編著

若者の意識の変容が指摘されるようになって久しい。有名大学や大企業に入ってエリート社員になりたい。そのためには、大学受験に向けて、やりたいことを犠牲にしてもただひたすら目標に向かって勉強する。これは長らく我々日本人が描いてきた高校生のイメージではなかっただろうか。しかし、現代の高校生はもはやこうした姿を保持しているわけではない。日本が高度成長期を経て成熟型社会に転換するにつれて、彼らの将来への希望、進路選択、学習への姿勢、職業希望等も変容しているに違いない。

本書は、いわば感覚として我々大人世代が感じている高校生の変容を、一九八〇年代から

一九九〇年代にかけて実際の高校三年生を対象とした質問紙調査をベースに実証分析により明らかにしている。

「詰め込み主義」への批判として様々な教育改革が実施されてきたなかで、高校生の生活に占める学校生活の比重は低下したのだろうか。「まじめ」や「努力」という旧世代の「理念」にかわって「自己実現」や「ジェンダーの平等」を取り入れた現代の高校生たちはどう社会に適応しようとしているのだろうか。教育に関しての論議には誰もが自分の経験を元に参加することが可能である。それだけに、しばしば思い込みや信念先行の議論に陥りやすい。このような教育改革論議に「高校生」の「精確」な姿をデータから提示することによって、議論の前提を明らかにすることができる点に本書の最大の意義があると思われる。そしてそれらが著者たちが意図していることでもある。

山田礼子（太学文学部助教授）



白桃書房
3,300円

ホスピタリティ・観光事典

山上

徹女子大学現代社会学部教授

ほか編著

二十一世紀を迎え、観光事業をはじめとするサービス関連産業の分野は、総じてホスピタリティ産業としての認識が深まりつつある。

現代社会において、ホスピタリティの領域は、単にヒトとヒト、ヒトとモノの交流においてのみ存在するものではない。地域社会や市民生活などにも密着したさまざまな領域のなかに存在するものである。

本書の特徴は、この視点を忠実に、またかなり意識した、細やかにして明瞭な編集方針にあるといえる。内容的には、主軸

となる観光事業分野の項目に加え、冠婚葬祭や現代社会生活に関する介護・福祉など、広範なホスピタリティ分野にわたっていることにある。また、将来にわたって進展すると考えられる、これらに係わるビジネス分野のホスピタリティ・マネジメント関連用語なども鋭意取り上げられており、詳細な用語解説がなされている。

本書のような事典の出版には、一般的な研究書とは異なり、常に座右に置かれて使用されるための配慮が必要なのは自明の理である。本書には、各章巻頭の解説や用語見出しの見やすさにも配慮し、利用しやすい「事典」としてのホスピタリティが伺える。これから、編者の知的交流の総力を挙げて取り組まれた点の評価とともに、現代社会の「事典」としての評価をも受けるものであると考える。

北川宗忠（流通科学大学教授）

初期ネーデルラント絵画

—その起源と性格—

アーウィン・パノフスキー著
勝 國興 (天文学部教授) ほか訳



中央公論美術出版
2冊組 78,000円

表題の「初期ネーデルラント絵画」とは、一四三〇年頃から十五世紀末にフランドル（現在のベルギーの一部）を中心に制作された絵画を指す。この時期はイタリアのクアットロチェントと同時期であり、フランドルは初期ルネッサンスの中心の一つであった。本書では、フレマールの画家、ヤン・ファン・エイク、ロヒール・ヴァン・デル・ウエイデンの作品研究に大半の頁が割かれている。また、十四世紀にパリで活躍した挿絵画家たち、「フランコ・フラマン派」の業績を詳述し、そこに

初期ネーデルラント絵画の源を求める。

さて、原著者のアーウィン・パノフスキーは、二十世紀を代表する美術史家の一人である。彼には数々の重要な著作があり、邦訳されたものも多い。しかし一九五三年に英語で出版された『初期ネーデルラント絵画』は、膨大な情報量と古典的教養に満たされた深遠な文章表現ゆえに翻訳出版は不可能とさえ思えた。実に仏語訳は一九九二年、独語訳に到ってはようやく二〇〇一年秋に出版された。このことは原著が同じ欧米文化圏でもいかに翻訳が困難であったかを示すとともに、出版後半世紀を経てなお学術的な価値を維持し続けていることを証明している。

本書がわが国の美術史学の発展にとって、大きく寄与することを筆者は信じて疑わない。

鮫島正安 (西洋美術史研究者)



音楽之友社
1,900円

即興による音楽療法の実際

石村真紀 (女子大学学芸部専任講師)

ほか著

音楽療法におけるセラピストとクライアントとの、「いま」と「ここ」から始まる、音楽的、人間的な相互交流に重点を置きながら、その関わりが、即興によって創造的な空間を生み、音楽がより綿密な即興的対応となつて、心理治療的な人間関係を展開させていく。そのような筆者の実際の臨床体験から、即興演奏や即興の対応の意義を明確にしている著書である。

第一章では、特に即興による音楽が、セラピストとクライアントの共通の言葉となり、通常の言葉では表現できない、あるいは言葉で明らかにすることが

不可能な場合の伝達手段となることや、セラピストとクライアントの肉面的な交流を成立させるための重要な視点、基本理念について、わかりやすく説明している。

第二章は、即興演奏のための基本的な知識や方法、ボキャブラリーについてである。ピアノの伴奏形態やスケールを譜例で紹介しており、弾いてみたくなる興味深い譜例がたくさんある。

第三章では、音楽療法の実践例からクライアントの変容のプロセスを具体的に紹介している。音楽を媒体とした心の交流を通して、クライアントの内面にある可能性がセラピストによって引き出されていくことがよくわかる。思わず涙する感動的な場面が多数あった。

本書は音楽療法を学ぼうとする人々にとっての必読本であり、また人のこころや可能性を考えさせてくれる魅力的な著書である。

成田和子 (女子大学学芸部助教授)



新葉館出版
1,800円

大学教授の介護日記 介護・男のうた365日

安森敏隆(女子大学志望部教授)著

本書は、歌人であり文学研究者の著者が義母の病氣と看病の様子を通して自らの〈生〉、また親子の愛情、家族の絆について綴ったものだ。

一日一日の〈介護〉記録を日記として書き記していくなか、現在の〈介護〉制度の在り方を問い直す視点が包含されていることに読者はすぐに気付かされる。そして何よりも著者自身の義母や家族に対する感情の変化が、《歌》として詠まれていることが、本書の最大の特徴であり、優れている点であると言えよう。人間が〈生〉と〈死〉を見つめ

た時の《歌》のもつ役割や価値を再認識させてくれる。言い替えば、人間の本源的な感情の発露として《韻文》が存在することを改めて知らされる。この書が《うた日記》として綴られ、詠まれていることの意義は、まさにそこにある。著者の歌からは家族の姿や心の動きが映し出されるだけでなく、私たちが日常抱えている様々な感情が表現されていて興味深い。

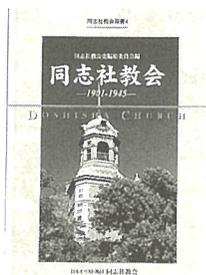
装画は息子の智司さんが手懸けられていて、とても瀟洒な作品に仕上がっているのも魅力的である。家族皆がそれぞれの〈生〉を生きながら、病の床に就く母(祖母)を通して交わる様子が簡潔な文で書かれているのが、却って繋がりの強さ、一人一人の思いの深さを感じさせる。著者の歌人として研究者としての良質が生かされた心打たれる一書である。

瀧本和成(立命館大学助教授)

『同志社教会 1901-1945』が刊行されました

同志社教会(日本キリスト教団)は創立125周年を迎えた2001年12月に、1901年から45年までの歴史をまとめた教会史、『同志社教会 1901-1945』を刊行しました。同志社教会は新島襄が自宅に設立した京都における最初のプロテスタント教会です。新島は同志社校長のかたわら、この教会の牧師として伝道にも尽力しました。

1996年、同志社教会は創立120周年を迎え、念願の教会史を分冊形式で出版することを企画しました。今回の出版は同志社教会双書1『同志社教会員歴史名簿』、同2『同志社教会創立120周年記念誌』、同3『京都のキリスト教-同志社教会の19世紀』に次ぐ双書4冊目で、これで1876年から1945年までの69年間の歩みをまとめたこととなります。2006年の教会創立130周年には、戦後から2006年までの歩みをまとめ、双書5として刊行する予定です。



同志社教会双書4『同志社教会 1901-1945』

同志社教会史編集委員会 編

日本キリスト教団 同志社教会 発行

B5版、474ページ/税込み 3,000円

取扱い：同志社大学事業課 (TEL075-251-3049)

同志社教会 (TEL075-256-1067)